

中国の経済改革と女性問題のゆくえ

——その地位・役割の変革を中心に——

許

堅

二十世紀に入ってから人類は実に多くの社会的変化を経験してきた。なかでも、社会主義体制の出現は人類に大きな影響を与えたといえよう。今日こそ男女平等は国・地域・社会制度を問わず、広く一般的に認められるようになったが、少なくとも社会主義体制となる前の中国は、女性が男尊女卑の意識下で、政権、族権、神権、夫権という四重の支配を受け、社会の最底辺におかれていた。社会主義の成功は、中国の女性に希望と光を与えた。社会主義革命によって、女性は解放され、経済、政治多方面にわたって男性と同様な権利を手に入れ、自立し、社会進出を果たした。しかし、その後、工業化の失敗、経済

成長の頓挫により、女性を家事から解放し、政治・経済分野に全面的に参加できるようにするはずだった方針は消えた。家庭及び男女それぞれの役割の再評価が行なわれ、女性には労働者として社会的有用労働に参加するとともに、妻として母として家庭を守り、育児する義務が強調され、しっかりと「二重の重荷」を背負わされることになったのである。社会主義においても、家事労働は男女の「自然による生物的分業」として女性が中心であった。輝かしい社会参加のイメージとは裏腹に「権利」であるはずの労働は低賃金ゆえの生活苦に迫られての「苦役」と化した。そして七十年代の後半に入って、中国は

周知の経済改革を始めた。経済改革の最大のねらいは競争機能を導入することによって経済の活性化をはかることである。そこで、大きく問題となったのは女性の地位低下、役割の再評価である。具体的には「女性は家に帰れ^②」という意見に代表されるように、「二重の重荷」を背負われた女性は次々と会社にレイアウトされ、女性解放は新たな試練を迎えている。

本文はそうした問題に対して、女性解放とは何か、社会主義革命が女性に何をもたらしたか、そして、近年の改革の中で起った一連の女性問題をめぐる論争について社会学の地位、役割の観点から分析し、掌握していきたい。

一、社会主義と女性の地位―役割の変化

社会主義は何をかえたか

地位―役割という言葉は、日常用語として頻繁にもちいられているし、そうした日常的用法は社会学的概念と

しての用法と重なりあうところも少なくない。その意味では、我々にとって地位―役割という言葉は決して見知らぬものではないであろう。しかし、社会学において特に重視されるのはそれ以上の理由がある。それが個人と社会とを結びつけ媒介する概念だからである。地位と役割は社会体系の単位をなしており、その分析は社会構造分析へとつながっていくのである。地位―役割は、人間が社会をつくり、逆に人間が社会に規定されるという二重の関係をとらえるための概念である。

地位と役割とは同一の概念ではないが、両者は相互に密接に関係しあっている。こうした両者の関係を統一的に把握する代表的な見解として、リントン・パーソンズの「地位―役割」概念が挙げられる。

リントン (R. Linton) に発し、パーソンズ (T. Parsons) やマーティン (R. K. Merton) らの構造―機能主義に受け継がれた考え方では、社会体系のなかで個人の占める位置が地位 (status) であり、その地位にふさわしいとされる行為様式が役割 (role) である。いいかえ

れば、それぞれの行為者の「立場」を社会体系のなかの位置（構造的側面）としてみたものが地位であり、社会体系に対してどんな機能を果たしているか（機能的側面）が役割である。社会への参与の二面として相即的なものとしてとらえられるのが特徴である。地位は位置という静的で形式的な面であり、役割は行為という動的で内容的な面を示している。このように地位と役割は相即的なもので分離しがたいので、「地位—役割」(status-role)という一体の概念としてあつかわれ、それが社会体系の構造的単位をなすとされるのである。

ところで個人は、決してただ一つの相互行為社会関係に入るわけでも、ただ一つの社会集団に属するわけでもない。このことは現代社会になればなるほど著しく、ジンメルのいう「社会圏の交錯」が進むのである。そして個人は多かれ少なかれ持続的な相互行為関係、社会集団の一つ一つにおいて、少なくとも一つの対人的役割または構造的役割をもつから、一人の個人が複数の役割つまり／＼役割群（role-set）をもつとも言える。ところで、

それぞれの役割は個人に対し別個にその遂行を要求するから、しばしば個人はある時点で、どちらの役割期待に応えるべきかジレンマに陥る。いいかえれば、行為者が役割葛藤 (role conflict) の状態におかれることになる。

こうした葛藤は一方では役割からの逸脱を助長するが、他方ではまた、役割期待そのものの変化を生む源ともなる。役割期待といい逸脱といっても、結局は人々の合意が基準となっているのであるから、逸脱も広く受け入れられれば、それはもはや逸脱ではなく新たな役割行為とみるべきなのである。この観点からすれば、産業革命であれ、政治革命であれ、あらゆる革命は必ず大規模な役割構造の変化をとまっている。とりわけ、中国の社会主義革命はその典型例の一つであると言える。中国革命はそれ以前の社会を徹底的に変えるものとして、「男は仕事、女は家庭」というジェンダー (gender) 観念を完全に否定した。社会主義の理念のもとで性別役割や家族のあり方は大きな変化をみせており、新たな制度化がすすんでいた。

社会主義革命前、とりわけ一九一一年の辛亥革命以前の中国社会では、「君主は家長として首長であり、国家の法律は法的な又道德的な規則である……統治の頂点には必然的に全機能を維持し、これを総括しているような主体、即ち家父長、皇帝が立っている」という家父長的専制主義の権力構造がずっと続いていた。しかも、「中

国の家父長権力、つまり、家父長と家族間の権利服従關係は、国家的乃至社会的規模にまで拡大され、君主は中国社会の家族構成の最高頂点にその座を占めて、『君主は民の父母』といわれるような配慮をもって権力支配を行ってきた。^③」このような専制主義的権力構造は結局四千年にわたって、中国を支配しつづけていた。そして、前近代における中国の家はたんに血のつながりによって結ばれた個人たちの統一体というようなものではない。家とは「ひとつの経済的家族、いかえれば血縁、結婚あるいは養子縁組によって結ばれた成員たちで構成され、予算と共有財産をもつ統一体^④」である。それゆえ、家は血縁と結婚という紐帯の基礎の上に、なによりもまず経

済的統一体として生きる人々をひとまとめにしているものである。その場合それは自然的な家族であることもあるが、あるいはまた先祖の遺産をまだ分割しないで、それに基づいていっしょに生活しており、したがって、その遺産によって、その本質的な、象徴的、経済的絆が表現されているような家族であることもある。

経済的統一体としての家族を統率しているのは家長であった。家長は家族員に対して、生命を含めあらゆる権限をもっている。しかしながら、注目に値するのは父親が子供の産み親であるということではなくて、祖先の血統に属していると言うことから、その權威を引き出してくると言う点である。息子が父を敬うのは、父のうちに潜在的な祖先を見るからである。そしてこの場合、子に対しては家長としてよりは、むしろ父であることによって強大の權威をもつとされている。

中国の家族関係を見る場合、同族という概念も極めて重要である。同族とは個々の家族を含んだ同祖同姓の父系血族団体である。同族を統率するのは族長である。さ

らに、同族はかれらの始祖以来の祖先を祭る族産としての家廟、祠堂をもち、それらの同族たることを系譜的に証明する族譜、家乗があり、またそれには、同族が安寧と秩序とを維持するために、守るべき族規、族約、族訓などが記されている。

かかる同族は単に家族の集合体にとどまらず、血縁共同体であり、それをさらに具体的に言えば家族主義的共同体であるということである。

同族共同体は中国の社会構造の基礎であると言えよう。毛沢東は、かの有名な『湖南農民運動の考察』の中で、中国人をしる権力構造を具体的に取上げ、そのなかで族権を極めて重要視していた。家族制度は同族共同内にあつては同族支配を強く受け、家父長的家族制度が独立に存在するものではない。同族共同体の解体によって、はじめて、家族は独自の社会の基礎細胞たりえたと指摘していた。

このような社会、家族構造の下で、女性が生まれた時から単なる物質的存在にすぎず、人格をもつ客体とは考

えられていなかった。子供を数える時も女の子はその数に入れなかった。女性は奴隷と同様「童養媳」（将来男の子の妻として、男の子の出生をみこして幼女をかうことの意味）に代表されるように取引の客体として売買されていた。結婚した女性は夫の妻である同時に、家の嫁であつた。嫁は家財、家系を継ぐ後取りを生む道具であり、労働力の再生産のための機械であつた。そして、女性性は性欲の対象として幼少の時から「纏足」をさせられる。

総じて、家父長専制主義の前近代において、婦人は政権、神権、族権、夫権という四重の支配を受けていながら、常に中国社会の最も低い地位におかれていた。『礼記』の「三従」で唱えるように、「女は常に男に従う。幼時には父と兄に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は息子に従う」ことが求められていた。そして、婦人に期待された役割は親、夫、家族に奉仕する労働力であり、家の継承のための再生産的である。

社会主義革命はまず封建的地主制を打破するために、土地改革を行い、同時に、婚姻法を制定した。新婚姻法

は男性が有するすべての権利を女性にも認めるようになった。そのなかで、特筆すべきものは、女性が始めて自分の名前をもてるようになり、その上、子供がその姓を継ぐことも認められたことである。すでに上述した通り、前近代の中国において、家名は社会における統一体と権力の象徴的な対価物として、長らく男子にしか与えられなかった特権であった。女たちにその家名を保持することを許すと言うことは、ひとり父系的親子関係に対する反撃であるばかりでなく、同時に、女たちを象徴的権力へ引き上げることもあった。それによって、女性は初めて独立した人格を持ち、男女平等の第一歩を踏みだした。

土地改革は村ではなく、郷を単位に個人的な均分を実現したものである。土地改革の進行によって、同族共同体は次第に打ち破れ、女性も男性と同様に土地を配分され、女性自立のための経済的条件が与えられた。しかし、その経営形態は依然として零細な家族経営である。そこにおいて家長は家族の長として家父長権をもつと同時に、

生産活動における責任者であり、指揮者でもある。言い換えれば、その生産は家族の労働によって行われているから、生産と家族形態はかく結合しているわけである。家長の家族員に対する家父長権を絶対的なものとし畏敬と恭順にもとづく「孝道」を固定的にとらえる見解は誤りであるとしても、その専制的性格は否定できなかった。

この家族経営はそのおくれた不完全なものであったから、その出発と同時に農業の協同化の方向をもち、この方向がその後、互助組から合作社、人民公社にいたる農業の協同化の道をとるにいたる。この協同化の過程の原動力になったものは家族労働の社会化、集団化である。この過程は一挙に転化したものではなく生産単位の拡大強化に従ってしだいになされたものである。この過程は同時に家族機能に反作用して、生産上の指揮が家族経営における家長から、合作社から選出された管理委員会の手に移って行く。つまり家族経営における家族と生産単位が分離して社会主義経営に進むわけである。こうなれば、その集団労働は個人別に労働に応じて報酬をうける

わけであるから、家族生活は生産の場を退き、消費の場になっていく。つまり、封建制からの個人の解放が、ブルジョア革命におけるようにそれ自体行われるのではなく、集団のなかで行われる。それにもかかわらず、合作社では労働報酬は、分配の面では家単位で行われていたから、家長権は解放前のそれとは異なるとはいえ、依然として存在し、婦人や子供の家族員は社会的に解放されながら、家族内では依然として家長権に服さざるをえなかった。この矛盾を解放したものは人民公社の段階である。人民公社では労働に応じた分配が家長に一括してあたえられるのではなく、完全に個人別に支給されるようになった。これにより、家族内の個人の解放、家族の民主化の基礎があたえられ、合作社段階ではなお残っていた家父長権は最終的に否定されるにいたった。

人民公社の段階に入ると、生産手段（土地・工場など）はすでに人民的ないし集団的所有になっており、その相続ということはあえりないが、消費手段としての家屋、家財、自留地などは個人的財産としてその相続権が男女

を問わず、平等に保障されている。従って家財の継承・拡大という前近代家族の機能は実質的に消滅してしまつた。

こうした家族・社会構造の変化によって、女性の地位・役割は大きく変化、向上した。家庭において、女性は男性と同等の権利をもつ一員であり、共同生活の伴侶である。家事についても男女分担化が進められた。一方、社会において、女性は社会主義革命の推進者であり、社会主義建設にとって欠せない主力部隊一部である。従って女性は「男性ができることは女性もできる」というスローガンの下で社会の各方面に進出を果した。社会主義革命は多くの意味で中国女性の地位を向上させ、女性を解放の道に導いたと言えよう。しかし、男女平等が、必ずしもすべての面において達成されたとは言えないものも数多くあることは否定できない。それは数千年にわたる「男尊女卑」思想の影響もあるが、社会主義自身もたらしめた部分もないわけではない。その一例として、女性の社会進出が挙げられる。

女性の社会進出は社会主義の付き物だと考える傾向があるが、少なくとも、中国の社会主義は必ずしも女性の社会進出と必然性をもつものではないように思われる。

女性の社会進出が必ずしも社会主義革命初期から押し進められたわけではなかった。大躍進直前まで、都市の婦人に對し、「上から」与えた女性理想像はいわゆる良妻賢母であった。「愛する夫や可愛い子供のために」という理由でなく、ほかならぬ社会主義建設のために、家事労働に専念しようというのである。

例えば、一九五七年六月に開かれた第一回全国労働者家族代表会議において、中華全国民主連合会主席の蔡暢は次のように演説していた。資本主義社会や、社会主義的改造が達成されていない社会においては、家事労働は自分の家族に奉仕するだけのものだが、社会主義的改造が行われれば、「夫の生産労働はすでに集団のための労働なのであるから、この時の家事労働も集団に奉仕するものに変化する……社会主義建設に奉仕する労働、光榮な労働へと變化する^⑥」というのである。しかし、これは決

して女性が社会進出をしてはいけないことを意味するものではなかった。女性を家事に専念させなければならぬ理由は、この蔡暢の演説の続きに表れている。「国家の工業の発展と社会的サービス事業の増加にしたがつて、家事労働は次第に減少し、軽減することができ。その時には、より多くの婦人はより多く時間で社会的な仕事に参加できる。しかしながら、これは国家の工業化水準が高度になってはじめて可能になるのである。したがって、相当長い時間が必要であって、決して短期間にできることではない^⑦」。つまり、女性が家事に専念すべきだという背景には、都市における雇用の限界が存在していたからであると言えよう。このように、女性が社会進出を始める当初から、中国婦人は社会労働において、常に男性に對して補助的役割しか期待されていない性格をもたざるを得なかった。その後も、そのことはしばしば中国婦人の社会進出の障礙になってしまふ。

女性が再び家庭から出て、社会進出をすすめられたのは文化大革命のころの家庭革命化の運動であるが、この

ことについては、紙幅の関係で、ここでは省略して、解放後の女性の政治における地位、役割を見てみよう。

解放前、中国女性には政治的地位がまったくなく、政治に参加する唯一の方法は上流階級の女性が夫もしくは父親といった男性あるいは家族の権力をもとに間接に参加するしかなかったのである。解放後、女性には政治に参加することができただけでなく、多くの女性は政治の重要なポストについた。しかし、彼女の多くは正のポストより副ポストつまり補助的、象徴的なポストにとどまった。さらに、彼女らが果たした役割は興味深い。多くの小説や映画等で見られるように、政治舞台において、彼女らは常に正しい政治路線を代表する革命的存在であった。それに対して、男性は保守的な役割を演じていた。しかし、変革のきっかけをつけても、彼女らだけでは、その成功をもたらすことができない。そこで彼女らを助けに出て来るのは党の代表者である。すなわち、社会主義社会で、女性の政治的な地位―役割は中国革命と婦人解放との相互依存関係によって決められている。毛沢東は抗日戦争

の期間の中、指摘したように、共産主義者は女性の支持がなければ、けっして敵を打ち破ることができないであろう。同時に、婦人の解放は、中国共産党の指導のもとで、中国革命の勝利によってはじめて可能になるであろうと指摘した。それは後に社会主義革命のさまざまな局面に應じて、上述した形となってあらわれてきた。

本節の最後に、次節とも深く関連する家事労働の問題について考えてみよう。

中国社会主義革命は男女平等を唱えたものの、決して家事労働における男女平等を考えていない。つまり、女性が抑圧されているもっとも大きな原因は、女性が社会的生産に不参加であったため、経済力がなかったことにあると考える。女性は家事に従事するのが天職であり、性により自然的分業である。このように、解放後の初期では、夫も家事労働を分担すべきだという発想は毛頭見られない。夫はそのすべての力を革命、国の建設に注ぐべきであり、妻は「勤勉、儉約で家庭をきりまわし、“五好”^③を実行し、労働者の生産労働を支援することに努め」夫

のよい内助（賢内助）になるべきである。

その後、大躍進運動の中で、労働力不足が生じ、それを補うために、広範な婦人が家庭から生産へ動員されることが要求された。したがって、婦人を家事の重荷から解放することが急務であった。しかし、その解決策は男性による家事分担ではなく、従来個人個人の手で行われてきた繁雑な家事労働を服務的な労働として集団化、社会化することであった。そのため、農村では、公共食堂や託児所が急速に発展し、食事をはじめ、育児、洗濯、布靴作り、裁縫などの家事労働は可能なかぎり、すべて集団化された。一九五八年から僅か一年間に、以前託児所さえなかった農村でも子供の七〇パーセントまでが託児所に入り、都市では、家事サービス・センターが組織され、その業務範囲は掃除、洗濯、繕もの、買い物、貯金などあらゆる雑用はもとより、火を起こしたり、魔法瓶にお湯をつめておくことまで含んでいた。北京では、一九六〇年にすでにこうしたサービス組織が二、二〇〇余でできている。¹⁰ここで働いているのが依然婦人であった

ことをつけくわえておこう。こうした家事の集団化とともに、機械による家事労働の軽減もこの時期に盛んに進められた。製麵機、野菜切り、ぎょうざの皮作り、洗濯機、ミシン、靴作りの機械などが研究開発され、広く採用されていた。しかし、そのずさんな経営、当時の生産力の限界、大躍進の失敗などにより、まもなく、公共食堂などはあいついで廃止され、家事労働の集団化、社会化による「中国婦人の第二の解放―家事労働からの解放」は結局失敗に終わってしまった。婦人はもう一度家庭にもどって繁雑な家事労働をひとり手で負わざるを得なかった。

そして、婦人が再び大量社会進出へと要請されたのは文化大革命に入って以後であった。大躍進の時の教訓もあって、女性の社会進出を促進するために、はじめて、女性の家事労働の軽減を、男性による家事労働の分担に求めることにした。いいかえれば、男性の家事労働の分担は決して男女平等の意識から来たものでもなく、政府が積極的に進めようとしたものでもない。それは大切な

男性労働力を失いたくないが、女性の社会進出も必要であるという矛盾の中で、苦心したあげくの苦肉策であったにすぎない。一方、男性の家事労働分担によって仕事に対する熱意が損なわれないように、政府は盛んにマイホーム主義に対する批判キャンペーンを展開していた。それゆえに、男性が家事を分担するとは言っても、所詮、家事労働の役割分担が行われないままに、男性の“善意”しだいであった。婦人は結局家事労働の大部分を背負ったまま、社会進出せざるを得なかった。女性の社会進出は景気調整に使われてしまう。

二、経済改革と女性問題の論争

周知の通り、中国は一九七八年以降、それまでの鎖国政策を改め、開放政策を実施するようになった。合わせて、国内でさまざまな諸改革を行ってきた。その内容を大きく二つに分けることが出来る。一つは、農業改革であり、もう一つは都市改革である。本文は中国の婦人の

地位―役割を論ずるものであることから、本文の問題に直接関係するものについて簡単に触れるにとどまりたい。

農業改革の主要なものは、人民公社の解体と、農業生産の請負責任制の導入である。すなわち、共同所有、共同生産を基本とする人民公社制度を廃止して、耕地を各戸に配分して、生産をすべて各戸に任せて、生産されたものを国に一部上納した後、残った部分はすべて自分のものになると言う“個人農”化するものである。それは、土地の所有を除けば、ほぼ大躍進以前の制度に戻されたものであると言えよう。改革の最大のねらいは、生産機能を再び家庭に戻すことによって失われていた生産意欲を呼び戻すところにある。

都市改革は主として企業改革が中心であった。すなわち、企業を中央集権指令経済から解放して市場競争原理を導入するものである。企業は経営組織として、生産から販売までのすべての権限をもち、利潤を獲得して国に税金を納める。そのねらいはやはり労働者の労働者の生

産意欲を喚起するものである。農村改革にせよ、都市に改革にせよ、競争機能を導入することによって経済の停滞から脱出をはかるという点で共通している。

こうした経済改革はさまざまな社会変革をもたらしたことは言うまでもない。土地を除くすべての生産手段が家庭所有になったことにより、家の意識が再び強くなった。生産活動が家を中心に行われることは、家庭はもはや単に消費の場であるだけでなく、生産の場でもあることを意味するようになった。生産、再生産によって、家は拡大され、繁栄して継続されなければならない。そのため、生産を組織し、一家をまとめるものとしての家長権が必要であらう。家長は家の繁栄、一家の生計を保証する代わりに、強い発言権を持っている。そして、生産をより効率的に行うために、家庭内分業が行われる。生産力が低く、労働集約的な農業では、男性中心の生産方式が余儀なく要求されてくる。それは「男が外、女は内」、「男が仕事、女は家事」ということを意味する。そこで、男性の優位が確定されてくる。都市部では、企

業への競争原理の導入は、すなわち、企業にとって非効率なものを切り捨てることである。女性は妊娠、出産などの生理的要因と大部分の家事を負担している現実からの要因によって、大きなハンディ・ギャップを背負い、企業にとってきわめて非効率なものであろう。したがって、企業においても、男性優位の生産方式が存在することになる。

開放政策はまた同時に意識の面にも変化をもたらした。その一つは女性への役割期待の変化である。つまり、開放政策以前の女性像は、なにがともあれ、まず革命的である。その代表は『鉄の娘』である。しかし、開放政策の実施後、女性像は大きく変わった。一九八四年に最もヒットした映画『郷音』では、開放以後ずっと社会の進歩に遅れた封建思想の残渣として批判された「良妻賢母」の女性像を正面から描いたことで大きな議論を呼んだ。雑誌『中国婦女』は「私が陶春（女主人公）であるべきかどうか」について誌面討論を行っていた¹⁾。女主人公がやさしくて勤勉で、夫の賢内助であったからこそ、家族は

あのように幸福な生活を送っていたんだ。彼女こそわが中華民族の何千年の美德の代表だ、と主張する人々¹²と、これこそ何千年にわたって女性を圧迫していた封建的思想、夫権の代表だ。女性を犠牲にして家族の幸わせがありえない。そんなもの男性に好都合だけで、まっぴらだと主張する人々¹³は、真っ向から対立した。前者の主張を支持する人は男性に多いことが言うまでもないが、女性の中にも、支持者は意外に少なくなかった。当時中国の経済改革はまだはじまったばかりで、女性問題はまだそれほど表にあらわれていなかった。討論はもう一つ盛り上がりがなく約半年ぐらいで終わった。

一九八六年に入って、改革が一段進行したのにつれて、女性問題が次第に顕在化するようになった。今まで、社会主義の「大釜飯」の経済体制の下で、競争もなく、仕事に手を抜きながら、仕事と家庭を両立してきたが、競争の導入で、そうはいかなくなった。そこで、夫は妻にしっかり家庭を守ってもらい、仕事上の「賢内助」となることを期待し、会社は女性労働者に男性と同様に仕事

の責任をもつことを期待し、そうした期待に、女性がどのように答えるべきか、という問題が出てきた。言い換えれば、女性の理想は何であるべきか、理想の女性は何であるべきかという問題である。もし、仕事と家庭が両立できなければ、女性はそのどちらを選択すべきであろうか。そうした問題に対し、雑誌『中国婦女』編集部は再び雑誌での討論を呼び掛けた。中国婦女聯合会宣伝部もあわせて全国各地でこの問題について討論するよう《女性の理想と理想の女性について討論を行うことに関する通知》を出した¹⁴。討論の争点は前回の討論と基本的に同じものであるが、前回の討論に較べて一段と突っ込んだものとなった。それは女性解放運動の存在意義に踏み込んだものであった。

投稿は全国各地から社会の各層、各職業の人から集まった。男性からの投稿も多く、討論に対する感心の高さを物語っている。投稿の中から、代表的な意見を少し紹介してみよう。中国語で「男子」と同じ発音する「南子」という筆名で投稿した男性の方は「アダムの困惑」とい

うタイトルの論文の中で、次のように述べた。「偉大なスローガン女性解放は適当であろうか。女性の顔が日々怖くなる一方で、『氣管炎』（妻管炎¹⁵）はエイズより流行している。女性の地位向上は男性の退却を特徴にしている。男性の退却の結果、家庭の幸福をもたらすところか、益々不満や怒りを導き、家庭内の衝突、危機を激化してしまう。男性の解放をなくしては女性の解放もありえない。進歩であった『女性解放』のスローガンは永遠に進歩するとは言えない。女性解放に関する政策、宣伝をやめて、女性に冷静に『アダムの困惑』を考えさせるべきだ¹⁶」。南子の主張はいささか過激な部分があるが、一方、一部分の男性がもっている根強い『困惑』を露していると言えよう。これに対し、男尊女卑、大男子主義、女性に対する差別はいたるところまだ残存している。したがって、女性解放を一層進めるべだという意見も数多く発表された¹⁷。

雑誌の討論とあわせて、中国各地でさまざまな討論会も同時におこなわれていた。中国湖南省婦人聯合会は

『良妻賢母』は今も女性の価値基準であろうかについて学術討論会を行った¹⁸。ここでも、良妻賢母は封建的道德規範であるために、提唱すべきではないとの意見と、良妻賢母こそが国の伝統の美德であり、社会主義経済建設、精神文明建設にとってかせないものであるために、積極的に継承すべきであるとの意見の対立が見られた。そのほか、社会主義社会では『良妻賢母』だけ提唱することは、女性に一方的に義務を負わせかねなく、女性差別につながるおそれがある。『良妻賢母』と同時に『良夫賢父』も一緒に提唱すべきである。そうしたら男女平等が実現できるという意見もあった。しかし、その『良夫賢父』の内容は必ずしも明確ではなく、ただ単に夫が妻に対して利己的、粗暴的であるべきではないという抽象的なものにすぎない。

女性は良妻賢母に徹して家庭にとどまるか、あるいは、多少家庭の犠牲があっても、女性はまず職をもつべきか、のいずれも女性の抱る矛盾を解決することができず、受け入れがたい意見である。というのは、中国女性が仕事

をする原因は単に男女平等を実現するためだけではないからである。前述したように、中国女性が社会進出し、就業するようになったのは男女平等の実現のほか二つの大きな原因が背景にあったことを忘れてはならない。すなわち、女性の社会進出は中国革命の一環であること。女性も社会主義革命の重要な担い手の一部分として社会主義の経済、政治、社会革命に参加しなければならなかった。それゆえに、女性はまず家庭を出て、社会建設に参加して、就業する必要があった。そして、中国の低賃金も女性の就業を促進する原因の一つであった。つまり、女性の就業なしには、家計はともなりたつことができない。いずれにせよ、この段階の議論はあくまでも、開放にとってもて発生した家庭と仕事の矛盾を前にしての紙上の理想論であった。従って、これといった結論を得るのには不可能であったことは言うまでもない。しかし、こうした議論をよそにして、社会の実体では、職業を離れて、家庭にもどっていく女性は着実に増えている一方である。しかも、強制されてしかたがなく家庭にもどっ

てしまう女性だけでなく、みずから仕事をやめて家庭にもどる女性も見られるようになった。議論に先行した女性の仕事からの撤退の現実、婦人問題の討論をあらたな段階に向かわせた。

一九八八年一月号の雑誌『中国婦女』は、二つの記事を発表した。一つは黎静の「我的出路在那——私の行く道はどこ」¹⁹⁾もう一つは張娟・馬文栄の「大邱庄“婦人回家”的思索——大邱庄婦女が家庭にもどることについての思索」²⁰⁾の記事である。前者は短大を卒業し三十七歳の一人の子供をもつ働く母親である。彼女は勤め先の工場の合理化で、八十パーセントの賃金をもらってレイアウトされた人である。そこで、まず家計は彼女の賃金の減額によって苦しくなった。そして、失業とともに、友人もだんだん彼女から離れていく。近所からいやみを言われる。失業後、家に帰った彼女は経済的、精神的重圧を感じ、社会の理解と人々からの尊敬を失ってしまった。彼女のおかれた状況は現在では決して特殊なものではない。改革にともなう企業の人員整理、合理化はしばしば女性

労働者の解雇、レイアウトの代名詞となる。広州市越秀區糖煙酒第一分公司は従業員五七〇人の会社であるが、女性労働者はそのうちの四六二人を占めている。一九八七年レイアウトした一五八人の従業員のうち一四七人が女性従業員であった。⁽²¹⁾同様の例はほかに多数もあった。彼女らはいずれも働きたいと考えているのにもかかわらず、合理化によって仕事をやめさせられたケースである。

それと対照的に、後者の記事は、経済改革でゆたかになったある村の女性がみずから仕事をやめたケースである。天津市郊外にある大邱庄は経済改革後、女性の平均賃金は一、六〇〇元〜一、七〇〇元であって全国の平均所得をはるかに超えている。一方、女性就業者は一九七九年の九十パーセントから十六パーセントに減少した。村の女性共産黨員十三名のうち、仕事に従事しているのは八人しかいない。しかし、彼女らは前者の女性のような悩みを少なくとも現段階では、まったくもっていない。むしろ、現状に満足しているようであった。その一人の李氏はつぎのように語った。「以前、我々女性は動物

のように働いていた。夜明け前に出勤し、男性すらしんどく感じる仕事も一緒にやってきた。晩、家に帰ると、また一家の食事や子供の世話をやらざるを得なかった。今はようやくよくなり、夫がたくさんの収入を得たから、家計もずいぶん楽になり、我々女性も少し楽で気を休める生活をおくることができた⁽²²⁾」と。

大邱庄の女性が家にもどったことは背景に生産力の発展があったことは言うまでもないが、それはどのような意味をもっているであろうか。生産力が発展した大邱庄では、家に帰ったのは婦人だけである。それは果たして生産力の発展が女性を家に帰すことを意味するものであろうか、あるいは、それは単に文化大革命の歪んだ女性解放からのゆりもどしであるにすぎないものであろうか。将来、中国の経済が発展していくにつれ、大邱庄の女性の道は、中国女性がいつか歩かざるを得ないものであろうか。

二つの記事は中国社会で大きな反響を呼んだ。雑誌『中国婦女』は上記の一連の討論の呼び掛けにつづいて、

『女性の出路』の討論を主催した。さらに、中国婦女聯合会宣教部も討論に関する通達を各省、市婦女聯合会に出した。⁽²³⁾ 討論の主題は以前の討論に較べて、より明確化になったこと、すべての女性が現実と直面している問題であったことから、討論は今までない盛り上がりを見せた。

当然、討論につきものの賛成論と反対論がここでも見られた。ここで数多くの投稿のうちから、まず賛成論の主な根拠をまとめてみよう。①家事と職業の二重の負担を解消できる。②夫が仕事に専念できる。③子供の教育によい。④家庭か職業か、選ぶ権利を女性に与えるべきである。⑤余剰労働力を削減することで、生産力の向上ははかられる。⑥現在の生産力の発展段階では、家事労働の社会化、十分な労働力需要など、女性が就業するための条件がない。

一方、「婦女回家」を反対する理由として、①女性が経済力を失う。②男女平等の基礎をゆるがす。③女性の自己表現・自己発見の機会を奪う。④女性の社会参加の

機会を奪う。⑤女性の社会的視野をせばめ、文化的素養を高める機会を奪う。などが挙げられている。

賛成論①の家事負担というのは、すでに前で述べたように、洗濯機や冷蔵庫などはまだ普及の途上で、市場で買ってくる野菜は土つき、にわとりや魚はまるごとである。仕事から帰ってから寝るまで夫婦とも勉強や娯楽の暇もなく家事に追いまくられる。両親が共に働いているため、いわゆるかぎっ子がよく見られるのも事実である。しかし、なによりも「婦女回家」論が出てきた真意は家庭の都合より⑤にある、ということに衆目一致する。つまり、余剰労働力をたくさん抱える中国の企業は競争に勝つため、人員整理をどうしてもせざるを得ない。女性は四つの時期（月経期、妊娠期、産期、授乳期）に欠勤しやすく、一人っ子に対する報奨金を企業が負担しなければならぬため、女性をクビにするのは企業経営から見て極めて「合理」な選択である。そうでなくても、一家のうち、「男性が家事、女性が仕事」という様式は男性にせよ、女性にせよ、あくまでも現段階では受け入れ

がたいのである。

それに、一生専業主婦でいるべしという主張は「婦女回家」の賛成論の中でもごく少数派である。多くは「段階就業」すなわち、子供が小さいうちは家庭にはいつて、一段落おいてまた勤めに出ると言う、いわゆる「M字型」の働き方を提案している。

「婦女回家」の反対論は「婦女回家」があくまでも女性解放の逆戻りであると主張し、賛成派の主張の中に、経済問題や家事負担の指摘など重要な点があるのを認めるが、その解決策は「婦女回家」ではなく、サービス産業を発展させることで、家事の社会化を押し進め、そのサービス産業に余剰の女子労働力を吸収することである。

中国婦女聯合会の調査結果²⁴⁾によると、「婦女回家」に賛成する人は女性に少なく、七十パーセントの女性は賛成しないという。賛成する人は男性にやや多い。特に、企業の責任者や経済学者が多い。ところで、この論争の背景には、政府の意向が強く存在していたことは見逃してはならない。そもそも、論争は一連の経済改革を進め

る上で行われている。政府にとって、経済改革を成功させるためには、企業の再建がなによりも不可欠である。そのために、企業の人員整理がどうしても必要となるわけである。すでに、前で検討してきたように、政府は中国の社会主義革命、社会建設運動の中で、何度も女性を社会進出させたり、内助の功として家に帰らせたりしてきた。今は、経済改革の成功のために、女性再び景気の調節弁として使われようとしている。いずれにせよ、「婦女回家」論争は中国人民共和国成立以来はじめて言論、思想の自由下で行われるものとして、中国の女性解放運動にとってはかれしれない意味をもつものであろう。

むすび

女性解放の中心問題は男女平等の追求であるが、男女平等を測る尺度の一つは地位―役割である。しかし、地位―役割は家族・社会の中の対人関係の中で決められていき、家族・社会構造の変革とともに変わっていくもの

である。

社会主義革命は少なくとも中国において男女平等の実現に積極的な役割を果たしたと言えよう。一方、その中で前の社会体制から残された未解決の問題に社会主義自身のもつ限界から新たな問題が加えられた。それは女性解放を社会主義革命の中でのみ、解決を求めようとしたこととであり、女性解放を社会主義革命の従属的立場においたことである。それらにまして、自由に女性問題を討論することができなかったことは重要である。そして言論の自由が実現しつつある今、全国的規模で女性問題を討論することは極めて意味深いことである。男女平等の実現、女性問題のすべてがこれで解決されてしまうとはとうてい思わないが、女性問題の女性による女性のための試みとして大いに評価されるべであらう。これから中国女性はどうのような結論を出すか大いに注目していきたい。

〔註〕

(1) 毛澤東は、これを女性の頭上にのし上がる四つの大山(四座大山)と呼んでいる。

(2) 一九八八年中国で行なわれた議論の一つである。中国語では「婦女回家」という、その詳細は本文の第二節を参照されたい。

(3) これは元々ヘーゲルの言葉であるが、本文は青山道夫編『講座 家族2 家族の構造と機能』弘文堂 一九七四年 一六四頁

(4) オルガ・ラング著 小川修訳『中国の家族と社会』岩波書店 一九五三年

(5) この時期の中国農村構造は次の通り村—郷—県。村は行政の最小の単位であり、血縁関係が非常に強く、村全体が同じ名字であるのは一般的である。それに対して郷は基本的に血縁関係が薄いものである。

(6) 蔡暢「家事労働を立派にやって国家建設に支援しよう」『中国婦女』一九五七年九号 三頁

(7) 前掲書 三頁

(8) 五好とは、儉約で家庭をきりまわし、団結して助け合い、子供の教育、家庭の衛生、学習すべてがよいことで

ある。

- (9) 汪章蘊、一九五七年中国婦女全国代表者大会報告、
『中国婦女』一九五七年十月 一〇頁
- (10) 中国研究所編『新中国年鑑』一九六二年版 一五四頁
- (11) 『中国婦女』一九八四年 四号 二頁
- (12) 例えば、陶然「『良妻賢母』のどこが悪いの」『中国婦女』一九八四年六号 二二頁
- (13) 例えば、徐旬「再び夫権を保護してはならない」『中国婦女』一九八四年六号 一九頁
- (14) 『中国婦女』一九八六年三号 二二頁
- (15) 妻管厳とは、妻の管理が厳しく、夫が妻を恐れていることである。
- (16) 『中国婦女』一九八六年三号 二〇頁
- (17) 例えば、歩平「婦女解放のスローガンは本当時時代遅れなのか」『中国婦女』一九八六年五号 八頁
- (18) 『中国婦女』一九八六年七号 八頁
- (19) 『中国婦女』一九八八年一号 六頁
- (20) 『中国婦女』一九八八年一号 八頁
- (21) 楊小敏「一五八名のレイアウト労働者のその後」

『中国婦女』一九八八年七号 二四頁

- (22) 張絹・馬文榮「大邱庄婦女が家庭にもどったことについて」の思索『中国婦女』一九八八年一号 九頁
- (23) 『中国婦女』一九八八年二号 七頁
- (24) 一九八八年「女性の進路についての全国都市調査」

(大学院博士前期課程)